

# 「都市」をめぐる論考の多世界解釈的な再読を通じて練る 考えられる「量子都市ガバナンス」の記述

谷村光浩

## ■もくじ

1. はじめに
2. 都市の説き立てられ方から
3. 工学的に整備される都市をめぐる
4. 量子力学的な世界観にもとづく掘り下げから
5. 改めて思索する多世界解釈から考えられる「量子都市ガバナンス」の記述

## 1. はじめに

グローバル化の進展とともに顕在化してきた、人々の“居住”状態に見受けられるパラレル性に対応するガバナンス論として、M. Tanimura (2005, 66-67; 2006, 276)は、「量子都市ガバナンス」という新たな思考を提起した。本論文は、この「量子都市ガバナンス」論の構築にむけた一連の研究にあって、「量子」「都市」「ガバナンス」の鍵となる要語のうち、中核の「都市」に関わる思索である。都市をめぐる論考の量子力学的な一ことに多世界解釈的な一再読をベースに、考えられる「量子都市ガバナンス」の記述を練り上げていきたい。

この新造語の「量子」に関しては、これまでに、「物理学からの類推より“考えられるガバナンス”の記述」(谷村 2009)にて、量子力学の“標準的”な読み解き方ではあるが“古典物理学とのつきはぎ”(町田 1994, 147)と指摘される「コペンハーゲン解釈」に比して、量子力学的な「スーパーポジション[複数の状態が重ね合わさっているという状況]」(和田 1998, 58)をそのまま受け入れる「多世界解釈」にならい、「多“居住”解釈」を提起した。続いて、「移動する人々を

めぐる論考からの類推より考えられる“量子都市ガバナンス”の記述」(谷村 2012)では、その提案を「多“居住”/多アイデンティティ解釈」へと広げた。その後、この事例研究として、まずは明清中国の「徽州商人のくらしが考究される視座、そして“考えられるガバナンス”の記述」(程・谷村 2013)にて、「“物理学からの類推”では想定しえなかった点」(108)を織り込むなどの補記をした<sup>(1)</sup>。また、現代中国にあっては、珠江デルタの“変貌する村”の描き出され方に着目した「多世界解釈からの類推より考えられる“量子都市ガバナンス”の記述」(谷村 2018)において、さらに「多居場所/多アイデンティティ/多連係/多経路解釈」を案出した<sup>(2)</sup>。

このところ「都市」をめぐるのは、経済・社会のデジタル化にあって、「コネクティッド・シティ」(UN-HABITAT 2016, 27)や「次世代スマート・シティ」(出口 2020, 1-3)などが政策課題に掲げられはじめたが、こうしたデジタル変革下の都市マネジメントに関しては、次のステップとして段取りをしている「ガバナンス」論の研究においてふれてみたい。

本論文は、何はともあれ、先学の高論卓説を引きながら、「都市の説き立てられ方」を概観

する作業からはじめてみたい。具体的には、「都市とは何か」という根本的な問いと向き合う論考にふれた後、時間・空間を切り口になされる研究の視座をたどってみる。歴史的に読み解かれる「都市」については、まず、「歴史」とは何かとの碩学の論究を踏まえた上で、いくつかの「都市・建築史」研究にて提示された視角をかえりみる。また、都市空間、情報社会/都市への眼差しにあっては、空間に着眼して説き示される「都市」や、情報を軸に説き起こされる「社会/都市」の見地を探る。そして、こうした「都市の説き立てられ方」につき、考察として量子力学的な読み直しを添えてみたい。

次いで、「工学的に整備される都市」に関しても、学究諸氏が提起される観点にあたってみる。「都市計画」的な思考・実践を振り返り、続いて「排除」の力学が作用するなかで、「別なありようを思索する場としてのスラム」や「関係当局主導の都市整備」をめぐる政策的討議・批評をとらえる。そして、さきほどと同様に、そうした言説につき、量子力学的な再考を加えてみる。

さらに、「都市(/社会)」をいかにとらえ、築くかといったことについて、いくつかの「量子力学的な世界観にもとづく掘り下げ」にもふれておきたい。「量子力学の思考で説き示される社会の見方」や、G. ドゥルーズの哲学をベースにした「プランニング理論をめぐる模索」について概観した後、これらの論考についても、いわゆる量子力学の「解釈問題」を踏まえて再読する。

そして最後に、各セクションにおける小考を改めて整理した上で、多世界解釈をベースにした試論「量子都市ガバナンス」—多居場所/多アイデンティティ/多連係/多経路解釈—に、さらに補筆を施してみたい。

なお、コペンハーゲン解釈的な記述にならざるを得ないが、“筆者”は、『第三世界の地域開

発』を起点に“途上国”の都市・住宅政策を学び、やがて国際開発・協力論へと関心が広がるなかで、“中国”を主たるフィールドとして実務的な事業を含め、調査研究を推進する機会などを得てきた。この小論においては、“みずからの歩み”(経路)に照らし、“汲み出し”ができそうなところから文献研究を進め、十分ではないがひとまず考え方の筋道を示すことができる域に達するように努めた。手の届いていない領域が多々あり、またそうしたところで見出される諸状態とも「量子的な重ね合わせ、もつれ合い」にあり得ることを、知り得てはいないが念頭にはおいている。

多世界解釈をベースに進める考察ではあるが、この試論自体も、ある意味、無数のあり得る記述のうち、ひとつの表し方にすぎないことになろう。実のところ、量子力学的な状態を“収縮”させずに“量子コヒーレント状態”のままに推しはかることを試みるにしても、“筆者”自身も、それをそのように描き切る力量はない。このことを率直に打ち明けた上で、本論の幕を開けたい。

## 2. 都市の説き立てられ方から

### 2-1. 「都市とは何か」

人口1,000万人以上のメガシティを主題に、「人類と地球の持続可能な未来」の研究プロジェクトを率いた松村伸(2016)は、はじめに「都市とは何か」との問いに関して、M. ウェーバーやG. ジンメルの視座を引きながら「混乱する都市の定義」(7)を概説している。そして、みずからは行政区域にとらわれず「世界一律の都市の定義」を案出するためとして、「ランドスキャン」(人口分布データベース)をもとに、人口密度が2,000人/km<sup>2</sup>より高いところを「都市」、その連続的な広がりを「都市域[社会・経済活動が集中的に行われている地域]」との概

念規定を試みる(9-10)。こうした人口密度への着目に関しては、「考古学者も都市社会学者も……結局は人口の多さで都市を決めている」(11)<sup>(3)</sup>とも述べている。

「都市の再生を考える」にあたり、「都市とは何か」を問い直す間宮陽介(2005)は、数量、機能、形態などに着眼した「どこか動物や植物の分類を思わせる」ような「辞書の定義」(8)ではなく、都市とは何「である」/「でない」のか、「都市の存在あるいは存在理由を問うこと」(9)の必要性を説く。C. アレグザンダーやJ. ジェイコブズが語る都市は「細部をもっている」(32)が、ル・コルビュジエの「まっ直ぐな道」はそこでの活動を「通行」に「収縮させがち」(33)一このように創出される「都市」は、ある人にとっては「非/反都市」(18)とも一と例示した後、「都市は……さまざまな活動の集積」(21)とみる著者は、その「空間が重複するあり方を考えないわけにはいかない」(34)と結んでいる。

『都市のリアル』<sup>(4)</sup>を考究する近森高明(2013)は、「都市とは何か」という問いに対して、まずは「都市を語る、という単一の特権的ポジションはもはや想定できないし、そんなポジションから語ってみたいところで誰も説得されはしない」(228)と言い切る。旧来の「都市を全体的システムと見る視点を捨て」(229)、H. ルフェーヴルの「都市的なもの」やW. ベンヤミンの「翻訳」をめぐる思考を糸口にして、次のような方策を探ることが有効と提起する(232)。

まっすぐにそこに向かい、それだけを取り出そうとすると、するりと手から抜け落ちてしまう、けっして汲みつくされないもの。そんな〈都市的なもの〉は、あくまでも可能かつ潜在的な対象としてある。だとすれば必要なのは、直接的にそれだけを抽出しようとするのではなく、数々の仕方で〈都市的なもの〉が顔をのぞかせている、都市的現実

の危機的＝批評的な局面をたどっていくこと、そしてまた、それら局面の記述と分析を互いに連鎖させることで、その連鎖が指し示す〈都市的なもの〉の様相を明らかにしていくことではないか。

いわば、「都市をではなく、都市から語ること」(229)が目指される。そして、各種「専門領域のコトバ」が対象のうちに問い逃し、消されてしまうであろう「残余、つまりは〈都市的なもの〉を拾い上げようとする」(235)その視座は、「いわゆる学際的アプローチ……といった発想とは、まったく異なる」とも記されている(238)。

都市の「不可視性」に関して、都市の記述法に注目する若林幹夫(1999)は、「問題は……都市の“見えなさ”というよりも、ある社会において都市の“見えなさ”がどのような可視性や了解可能性の表象に回収されるか(あるいはされないか)ということ」と説き明かす(16)。古代や中世の「形象化された[象徴的な]都市」から近代以降の「形象化されない[アレゴリー的な<sup>(5)</sup>]都市」への移行(32)を描き出す著者は、間違いなく「見えていた」というかつての都市も、その全域が「象徴的な体系や構造的な図式を通じて表象され、読み取られているのであって、“都市そのもの”などいささかも把握されたり可視化されたりはしていない」(15)と指摘する。また、「都市の形象性」の「喪失」という語りには、「人が都市や社会の全体として形象化されたあり方を、無意識のうちに規範的なものとして想定している」(44)と論じ詰める。

そして、近著にて『社会が現れるとき[How We Meet Society?』との問いに向き合うなか、若林幹夫(2018)は、このようにとらえがたい“都市”に関して、「了解可能なものにしようとし、またそこに物理的に介入することによって構造や秩序や形式を与えようとする知と実践

を通じて、それらは“都市”と呼ばれ、“都市”として扱われ、それらの知と行為を通じて“都市”が〈あること〉にされてきた」(24-25)と記している<sup>(6)</sup>。

## 2-2. 歴史的に読み解かれる「都市」から

### ■まず「歴史」とは何か

1961年、歴史家E. H. カーは、ケンブリッジ大学での連続講演『歴史とは何か』(カー1962)にて、「歴史とは過去と現在との間の対話」や、さらに踏み込んで「過去の諸事件と次第に現われて来る未来の諸目的との間の対話」(184)と述べている。そして、歴史家の作業とは、ある著述家が「人間の精神の過程」について論じたように、「観察された“事実”をつめこんだ頭陀袋をかきまわしながら、そこから、観察された“有意味”な事実というものを選び出し、繋ぎ合わせ、一つの型に作り上げ、他方、“無意味”なものを捨てて行って、最後に“知識”という論理的で合理的な編物を編み上げる」(152-153)ことと素描でき、そうした「意味あるものの選択」、ひいては過去に対する「解釈」は、「新しいゴールが次第に現われるに伴って進化」(184)するとも巧みに語る。

20世紀後半に討議が積み重ねられてきた「歴史の物語り理論」から説き起こす鹿島徹(2006, vii)は、『可能性としての歴史』を提起する。歴史が「物語られる」際に「出来事の取捨選択」がなされるとは、「一定の事象の排除・隠蔽が必ずそこに随伴するという事態」(6)との見地から、W. ベンヤミンの時間概念「現在時(Jetztzeit)[過去と現在とが重なりあう瞬間]」(230-231)<sup>(7)</sup>なども取り込みながら、打ち捨てられた「歴史の屑」の収集・探究(76-77)から取りかかる「痕跡を手がかりとした新たな歴史の語り」(6)を考究する。「伝統」をまとった「集団の来歴の語り」(176, 238)への対抗を試みる著者は、「歴史」を次のように力説する(vi)。

通念には反するかもしれないが、……「歴史」とは、過去に生じた出来事としてひとつの完結した事実を意味するにとどまりはしない。さまざまな痕跡や記録を回路として呼び出され、一見自足しているかにみえる〈現在〉の奥底にひそむ異貌の深層として忽然と姿をあらわし、人びとにこれまでとは別様の生のありかたへと歩を進ませうる、そのようなものであるはずだ。

「近代」や「国家」といった思考の枠組みから遠ざかったところから「歴史の可能性」を探る岡本充弘(2018)は、ポストモダニズム<sup>(8)</sup>の視角を足がかりに、「とりわけ学問的な歴史からはその外部に置かれていた……歴史へのアプローチ」(239)に目を向ける。「歴史は[個々人の中に形成されていく知だから]個人個人によって異なる」(ii)と強調する著者は、具体的には、専門的歴史研究者によらない「ファミリーヒストリー[家系図づくり]」(239)、一般の人々の間に作り出され、伝えられる「パブリックヒストリー」(243)、さらには人間中心主義でなく、宇宙や地球環境といった大きな時空で論じられる「ビッグヒストリー」(250)を例にあげ、それらには「これまでの歴史学が見落としてきたものを、見出せる」(262)という。そして、結びでは、「歴史はけっして人々を支配し、抑圧し、差別することを助けるものであってはならない。一人一人の人生を豊かにするもの」(263)との切なる思いを表明している。

■いくつかの「都市・建築史」研究の視角から  
建築評論家の飯島洋一(2015)は、『建築と歴史』の論考を通じて、結局「決定的な歴史を叙述するのは、常に勝者である」と見て取り<sup>(9)</sup>、「“建築史”も、この例外ではない」(403)と続ける。権威ある「大文字の建築史」とは、ほかならぬ「西洋の“視線”」によって選定・描出されたものと評する(404)。ときに、さまざまに語

られる「近代の“起源”」については、著者は、まず「近代の“構造”」の要点とは「直線的で、逆行せず、かならず前方へと流れる歴史的時間」と「時間は反復不可能であるという感覚」(158)とし、よってかつての「円環的な時間[閉じた円環の反復というイメージ]」(160)が崩れ、この「直線的な時間」がはじまった時代と解く(158, 161)。ただ、これは「とりあえずそれに決めておく、というだけの話」(163)で、大事なことは「近代の“構造”が“直線”であるという事実だけ」(164)と付け加えている。

『都市論を学ぶための12冊』を選び出した若林幹夫(2014)のガイドブックにおいては、「都市を、劇場として、舞台として、そしてそこでの上演として、読み解く可能性」(81)を抱かせる書として、大室幹雄著『劇場都市—古代中国の世界像』が評釈されている。礼という「一種の演技教則」(70)にそってみずからの身体を操る人々に加え、都市の「象徴性」や「機能性」の論理には「回収され尽くされることのない人びと[遊侠や……軽薄少年たち]の生」(73)を描く視座が、要領よく説き示される。また、『らいき礼記』の都市論(75-79)のセクションにあっては、「過去を理想化し、現在をそこから衰退した時代と見なす歴史観・世界観」に根ざした「二つの社会類型—嘆かわしい社会とその「陰画」としての理想社会—の対比という思考法が平易に述べられている。なお、大室幹雄(1981)は、そうした「虚構の理想社会」(38)の立ち上げに関して、「時代は共通でありながら、空間的つまり地理的に作者の社会とは隔たった地点に……設定」と、「地理的空間的には同一の場所であるが、時間の系列にそって現在から過去あるいは未来へ……設定」(39)の2方向があり得るという。

東京大学大学院にて、ひとつの地域としての『モンゴルにおける都市建築史研究』を試みた包慕萍(2005)は、「異なる文明、異なる時代、

異なる性格(宗教、貿易、政治)によって形成された骨格が、時代が変遷する過程で消滅することなく、幾重にも積み重ねられてきた「遊牧と定住の重層都市フフホト」(iii)を軸に考察を進めている<sup>(10)</sup>。研究のそもそものきっかけは、「中国建築という樹木においては漢の文化が根幹や枝をなし、それ以外の民族の建築はそこに接木され、花を咲かせて消えていったという構図が窺えた」(291)留学前の専門教育と語る。著者は、終章にて、都市・建築について「各地域で異なっている近世の基盤を検証すること」(289)の重要性を説き、次のように指摘している(288)。

従来の中国近代建築史においては現在の国家の枠組に基づいて研究が行われ、往々にして歴史的な差異は無視され、近世は同じ近代国家の中における均質なものとして認識されてきた。この認識に基づいた中国の近代建築史研究は、西洋からの影響による変容のみに重きを置き、各地方建築文化の変容を見落とし[て]きた。

古くからの交通路、「草原の道」を西に向かえば、トルコ文学史を専攻する宮下遼(2018)が、「詩人[文化的選良]、庶民、異邦人[フランス人旅行者]」という「観察者」が記した史料を丹念にあたり、近世オスマン帝都イスタンブルを「歴史的な重層性に拠った多元的言説空間」(335)として描き出している。かのアヤソフィアを例に、著者は、「彼らはおおむね同じ時期に、しかも同一の対象を実見しながらも……おのおのにまったく異なった層に目を向けている」といった「視線の分散」<sup>(11)</sup>(337)について、次のように考察する(338)。

近世のイスタンブルに居合わせた観察者たちは、イスタンブルという都市を形作る建築

物や人的対象……と相対した際、確かにその観察行為をおのおのの文化的背景に応じて行ったのだけれども、その一方で都市の内面に不可視の状態で胚胎された歴史的重層性によっても、その観察を方向づけられているのである。

また、そうした観察者に写し取られた「都市の空間的差異化」は、「居住地の差別化という現実の空間における住み分けよりも、むしろ同一の都市景観をその目に収めながらも、まったく異なった都市像を抱くという精神的な領域でこそ起こっていたと考えられる」(337)との見方も示している。

### 2-3. 都市空間、情報社会 / 都市への眼差しから

#### ■空間に着眼して説き示される「都市」

都市空間に関わる社会理論研究の第一人者、東北大学名誉教授の吉原直樹(2018)は、「都市社会学の系譜」の概観にあたり、まずは19世紀から20世紀の転換期に生じた「都市社会学の原点：シカゴ学派の世界」(ii, ch.1)から説き起こす。そして、1970年代後半以降の動きとして、「社会理論における空間の発見」をもたらした空間論的転回[spatial turn] (91, 95)と響き合う、「新しい都市社会学」の誕生：空間をとらえる視点」(ch.4)を取り上げている。また、近年にいたっては、「モビリティーズ・スタディーズ」をベースに「空間論的転回から[その発展形態である]移動論的転回へ」(ch.6)と新たな方向を鮮やかにとらえ、「反還元主義的思考」「複雑性科学」「オートポイエーシス概念」<sup>(12)</sup>などの要語を足がかりに、都市社会学のさらなる「理論的革新」の可能性を思索する。

若林幹夫(1999)は、「都市の全域性をめぐって」の論考で、都市論、都市社会学、都市地理学で語られるそうした「空間論的転回」とは、「空間のないし地理的な変数を時間的・歴史的な変

数と共に中核に据えることによって、社会理論のいわば“革新”を目指そうとしている」(38)動きと読み解き、先に引いた「形象化された都市」から「形象化されない都市」への移行とのつながりでもって、次のように述べている(42)。

都市の社会学における空間論的転回……は、都市を一個の社会として形象化することの困難に際して、それをひとつの社会として捉えることを断念し、それに代わる社会的事実である「空間」をめぐる社会的な諸関係の中に、社会学的思考の新たな対象を求めようとする。……都市をひとつの「社会」として捉えることの困難と、「都市」に代わる社会学的形象としての「空間」の発見とは、近代の都市が形の崩れた、形象として想像することが困難で、全体性が見通し難い領域になってしまったことに対する社会学的な知の反応なのだ。

東京大学社会科学研究所「希望学プロジェクト」にて希望と人々の暮らしへの考察を深めた西野淑美(2018)は、都市社会学や地理学の潮流を俯瞰した上で、はたしてそのように「都市という社会的なモノを単一の全体として語ってよいのか」(32)と問い、「都市空間への複数のリアリティ」(31)の再考を試みる。都市社会学などでしばしば力説されてきた「都市という一つの物理的な存在に対して、[階層やエスニシティなどの社会的属性によって]複数のリアリティが成立している」との見地をこえ、「リアリティの立ち現れ方自体も複数なのではないか」と提起する著者は、「同じ人物の中でも常に同じ立ち現れ方をするとは限らない」というような「非均質さ」(34)に目を向ける。

みずからの企図を、「都市の空間に対するリアリティが非均質に立ち現れる場面をできるだけそのまま切り取り、その非均質さを、物理性

と社会性の重層という都市空間の特質に関連付けて説明すること」(34-35)と述べるこの著者は、震災復興と地域コミュニティなどの具体例を丹念にあたる。そして、「空間は常に意識されるわけではなく、主題化されたりされなかったりする」(59)ことや「[自分を取り巻く、物理的なモノに見えていた]空間が桎梏として作用する場合に……“社会”の存在が感覚されやすくなること」<sup>(13)</sup>(37, 60)といった「メカニズム」を見出した後、結びでは、「単一性や全体性を暗黙に仮構したままで、社会的なモノとしての都市を描いたならば、都市に生きることの重要な特性を取り逃がすことになるだろう」(61)と戒めている。

#### ■情報を軸に説き起こされる「社会/都市」

M. マクルーハンの「メディア史観」、N. ルーマンの「社会システム論」を足がかりに「情報社会」の本質を考究する大黒岳彦(2016)は、「現在われわれは、〈メディア〉の次元でマスメディア・パラダイムからインターネットをベースとした〈ネットワーク〉パラダイムへのパラダイム・チェンジの只中にある」(145-146)という。「社会そのものを構成する単位要素」とは、人間でも、人工知能(AI)・ロボットでもなく、「飽くまでも非人称的〈コミュニケーション〉そのもの」(118, 220)ととらえ、その「社会」とは「観察の“対象”であると同時に[他ならぬ社会が]観察[記述]の“主体”でもあるような優れて自己言及的で動的な存立体＝〈システム〉」(125)と説き示す<sup>(14)</sup>。そして、「別様でもあり得る」といった「多元性」(302)については、以下のように記して、システムの「拡大」に拠らずに「非連続のプロセスとしての“変態”」(Metamorphose)と言い表し、「システムにとっての所与ではなく、システムの〈自己超越〉＝〈脱構築〉の効果」と論じる(303-304)。

システム〈外部〉に別のシステムを見出し、

それらを多元性の項として実体化することは、その〈外部〉的存立体が実在世界に属するリアルなコミュニティであろうと、あるいは並行世界の可能的なヴァーチャル・コミュニティであろうと断じて不可である。なぜなら情報社会においては「世界社会」という<sup>ただ</sup>唯一のシステムが存在するのみであり、しかも社会が〈コミュニケーション〉の連鎖的接続の別名である以上、その〈外部〉は原理的に存在し得ないからである。

もっとも、昨今の「情報都市」や「サイバー都市」の語られ方を視野に、情報・メディア社会の変容と「人間の条件」を考究する若林幹夫(2010)は、たとえば“ユビキタス”なる社会が展望されるにせよ、それは「人間の社会が生きる現実や情報のある部分のみを“現実”や“情報”とし、他の部分を排除するところに成立している」(190)と指摘する。そして、「社会の中にあるメディアが開くヴァーチャルな場を、社会そのものと外延を同じくする“新しい社会”であるかのように見誤るといふ、“ヴァーチャルの罟”」(199)に陥らぬように警鐘を鳴らす。

私たちは、近・現代の「メディアに媒介された場だけを生きようになっただけではなく」(214)、「混成的[ヘテロニアス]な物理的世界と、混成的なメディア媒介的な諸領域からなる、いわば“まだら”で、それら相互の間が多様な経路で繋がった世界を“どっちつかず”に生きている」(213, 215)<sup>(15)</sup>と読み解く著者は、「人間の条件とは、自己と社会の……混成的でどっちつかずのあり方を受け入れて生きてゆくということ」(217)との見方を提起している。

なお、先述の「空間論的転回」も含め、学部生向けに「地理学的思考」を解説するハバード他(2018)は、「近年の歴史を明確なパラダイムの変化の観点から書く試みは……非常に問題が

多い」(36)とし、次のように注意を喚起する(36-37)。

地理学が統一された(一般的な)パラダイムを通して活動してきたという考え方は、支配的あるいは流行の活動に適応しなかった人びとに関連した考え方と実践をうまくごまかしてしまう。最良の方法が存在するという昔の地理学者間の意見の一致は完全であることも、安定していることも稀であったし、そうであったと強弁することは、多くの研究者の声を無視することになる。……異議を唱える声と地理学内部のそれに代わる伝統は、地理学の歴史では些細な事柄とされたり、そして排除されたりしている……。同時にわれわれは、その複数の歴史ではなく、地理学の歴史を直線的に発展したものと要約する説明には用心しなければならない。

対象への接近の仕方をみずから「選択できる」ように促す著者らは、「どのようなアプローチが自分の世界観察にふさわしいか」を見極め、「他のアプローチについては、……どれが分析のツールとして役立つかをよく検討すべき」(350)と記し、合わせて「地理学的に考えることには適切なものも、不適切なものもないことを認めなければならない」(351)と力説する。

#### 2-4. 都市の説き立てられ方の量子力学的な再読

ここで、これまで概観してきた都市(/社会)の説き立てられ方に、まだ試論段階ではあるが「量子都市ガバナンス」から考え得る“読み解き”を添えるかたちを通じて、先学の視座を思索に織り込む作業を進めてみたい。

まず、かの《頭陀袋》のたとえで示されていたような構図は、いずれの説き立てられ方にもおおよそ見て取れ、思考の基本的な過程がなるほどよく表現されている。その諸々の《観察さ

れた“事実”》が量子力学的な重ね合わせ、もつれ合いにあると思えば、この絵解きは量子力学における観測に関わる「コペンハーゲン解釈」にあらかた通じよう。

講論にあたり、《観察者》が、個のそうしたあり方を含め、何らかの特筆に値する固定的なアイデンティティで見出され、対象とされるもの・ことに目を向けるさまが語られる。そして、「どの状態が選ばれるか」については、確率的な論及はないものの、観察から《“有意味”な事実》とされる状態が《選択》され、《“無意味”なもの/視点[ものを考える立場、視線の注がれるところ]》、《些細》とされる事項・状態は、人為的に《捨て》られ、《消されてしまう》。ときに、その《取捨選択》をめぐるのは、他の《観察者》から《問い逃し》、《無視》、《排除・隠蔽》などと指摘されることもあり、《危機的=批評的な局面》ないしは《見落としてきたもの》、《細部》、《痕跡》、《奥底》、《外部》、《残余》、打ち捨てられた《屑》とされるもの・ことにこそ目配りをし、しっかり《拾い上げ》よとのオルタナティブな考え方や、その視角がとらえたもの・ことが提起されることもある。

いずれにしても、そのように何らかの意で際立ったと《感覚され》た、いかにも《主題化された》などと析出されるいくつかの状態についてのみ、《編み上げ》/《繋ぎ合わせ》る工夫が施され、ときによると、それらの関係は、造作もなく《積み重ね》られ、《集積》、《重複》、《重層性》といった常套語句で締めくくられることがある。また、観察した状態が《直線的》な時間の流れにそってならべられ、《観察の“対象”》の《転回》、《パラダイム・チェンジ》、《<sup>メタ</sup>モルフォーゼ“変態”》など、《変化》・転換として強く説かれていく。

つまるところ、《見えていた》とされてきた《形象化された[象徴的な]都市》も、《陰画としての/虚構の理想社会》も、さらには《形象化



されない[アレゴリー的な]都市》，特定の観点に立つ《システム論》なども、いずれも《対象》を観察した際に《収縮》したように語られる一状態の記述ととらえるなら、「コペンハーゲン解釈」に特有なその術語と期せずして合致する。

また、根本的に、《混成的[ヘテロジニアス]な》諸要素からなる、《“まだら”》で、それらが《多様な経路で繋がった世界》といった状態を、《“どっちつかず”に生きている》との素描に関しては、「コペンハーゲン解釈を数学上焼き直した」かたちの「アンサンブル([統計的]集団)解釈」が仮構する、「複数の状態のうちどれか一つが確率的に実現しているという状況」（和田 1998, 58, 78; 谷村 2018, 3-4, 17）なる言説をふと思ひ起こさせる。まさに《取り出そうとすると、抜け落ちてしまう、汲みつくされないもの》の観察ということならば、《観察者》が《見出せる》とした何らかの意で力説された《局面》、《本質》など以外にも、同時に共存している数えきれない事項・状態を《消滅》させることなく、それら無数の「どれもと同時に生きている」ことを念頭におき得る量子力学の多世界解釈的な思考は、おそらくひとつの足がかりとなる。

《劇場・舞台》なる《都市》のありよう、《近代の“構造”》、《嘆かわしい社会》にしても、《回路》、《経路》のつながり方、歩み方にしても、これまでにみた先駆者による考究は、かりに量子力学的な重ね合わせ、もつれ合いの状況をベースとする理路にまで展開して推しはかっても、コペンハーゲン解釈のような思考・論述と見て取れる。どのアプローチが《ふさわしいか》/《役立つか》を見極め、簡明にひとつの、または、二項対立のないいくつかの事項・状態だけに的を絞ることで、力強い問題提起や提言は可能となるが、この解釈のもとでの《観察者》は一《観察者》なる人々を観察する人も含めて一、《視線の分散》なる問題から逃れられない。

最後に、都市/社会を説き明かすにあたり、対象とされるもの・ことが《〈あること〉にされてきた》という観点や、《観察の“対象”であると同時に観察の“主体”でもある》との視座は、“物理学からの類推”（谷村 2009）では考えることがなかった見方である。

### 3. 工学的に整備される都市をめぐって

#### 3-1. 「都市計画」的な思考・実践から

近代以降の都市を視野に、若林幹夫(1999)は、「都市計画的な思考と実践」とは、「そこにあるべき秩序を想定し、その想定の下に都市の現状を批判しつつ、物的な施設の配置や用途地域指定などの工学的かつ政策的な操作を通じて都市の合理的な秩序を形成すること」（193）とあらましを示した後、さらに次のようにも説き明かしている（196）。

都市工学的な思考は、都市の衛生や治安、貧困や道徳をめぐる思考とも結びつき、地図的な平面と統計的な表を通じて、生産性が低く、非衛生的で、怠惰な身体や不適切な施設が存在する場所を規格外の「外部」として見出し、徴づけ、クリアランスや改良などの計画的な実践を通じてそれらを「適正化」してゆくのである。

また、若林幹夫(2000)は、「現代都市の地形と論理」の分析において、「近代都市計画」につき、「近世以前のユートピア的都市のように、理念的・想像的な位相で都市という社会を意味づけるものではなく、そこでの身体や物財の配置や移動のシステムを整序し、調整するという物質的な位相で都市という社会の存立に関与」（181）とも説き起こす。そして、消費社会にあって、都市計画は「都市的活動を支える機能的な“メカニズム”だけでなく、“アメニティ”のよう

な感性的な部分をも計画し、開発し、商品化するようになった」(191)と指摘する。「都市の現実の現象形態はつねに他にもありえる」(182)という、近代に立ち現れた「未然の〈未来〉へと向けて更新されつづける都市」(183)を、著者は巧みに素描する。

「居住空間の再生」という観点から都市計画を再考する岩見良太郎(1996)は、「近代都市計画が目指したものは、何よりも合理的都市空間の形成、土地利用の効率性であって、意味に彩られた空間としての場所の創造ではなかった」(260)と指摘し、ひとつの試みとして「場所と場[場所形成場<sup>16)</sup>]の都市計画」への転換を提起している(271)。

まず「空間」と「場所」が峻別され、「空間」に意味が発見され、価値が見出されたとき、その空間は場所として認められる」(261)との見方が示される。そして「場所」の特性には、[1]「主観性 [同じ人でも、時や状況が違えば、そこに見出す場所は異なる]」、[2]「複合可能性 [そこには場所の無限の重なりを許容しうる]」などが掲げられ(262)、「空間の場合、ある空間に他の空間が入り込む余地はない」(262)と対比の後、「重なり合えるのは実体的空間ではなく、場所なのである」(273)と繰り返し強調されている。

つまるところ、居住空間ないしは都市の魅力とは、「そこに、どれだけ濃密な、場所の重なり合いが見られるかに依存する」(262)という著者は、「場所づくりとしての都市計画」(274)ならびに「場の変革と創造」への取り組み—具体的には、地域住民の「自主的・共同的な力」の育成、個人・商業主義などに対する「思想的変革」、地方自治をめぐる「政治的変革」の闘い—(276-278)の重要性を力説する。

「都市計画家」ではありながらと断って、饗庭伸(2015)は、空間的なビジョンの提案・実現はひかえ、「[都市をつくることを目的には生

きていない]普通の人」の感覚をベースにした思索を凝らす(15)。何より、「都市を[古いものも、元からあったかのように]“自然”と受け止めず、誰かの計画にもとづいた“手段”の集合である」(19, 21)と説き立て、「都市をどう読み替え、新たな目的、新たな計画に基づく“手段”として、どう働いてもらうか」(21)に視線を向ける。都市空間を「人口の容れ物」と言い表す著者は、「都市計画」の役目とは、その「人口と空間の間を調整する細やかな制度や手法の体系」をもって、「“人口”を適切に“都市空間”にフィットさせていくこと」(47)と力説する。

人口減少時代をにらみ、『都市をたたむ』という概念を掲げる饗庭伸(2015)は、その意を次のように説き示している(52)。

[都市を“たたむ”の]英訳は「shut down = 店をたたむ」ではなく、「fold up= 紙をたたむ、風呂敷をたたむ」である。つまり、この言葉にはいずれ「開く」かもしれないというニュアンスを込めている。……一度は間引いて農地[／緑地や空地]に戻すけれども、将来的に再び都市として使う可能性がある場所は存在する。……都市的な土地利用への再転換も想定する、その長期的な土地利用の変化も計画的な介入の対象にする ……。

そして、そのように「都市をたたむための技術」(ch.4)については、都市のさまざまな機能—住宅、工業、商業、農業、自然—が、「一つの平面上にゾーンに区切られて存在するのではなく、機能別のレイヤーの重なりとして存在していて、レイヤーはそれぞれの独自のメカニズム、独自のスピードで動くと捉える」(161)—まさしく「全ての空間に全てのレイヤーの可能性があると考える」(162)—モデルの有用性が説かれ、「顕在化している複数のレイヤーの可能性を読み取り、それを組み合わせながら空間

のデザインを丁寧に組み立てていく、というスタイルへの変化」(163)が促されている<sup>(17)</sup>。

防災・復興まちづくりプランナー等の研究会からは、都市の公園、農地、未利用地などに対して、日常的な「表」の利用形態・機能とは別に、非日常時の「裏」の利用の姿・役割を事前に「仮設[時限的]市街地」<sup>(18)</sup>(シャドウプラン)として描き出し、「防災機能を多重に拡充しておくこと」が肝要との提言がなされている(仮設市街地研究会 2008, 24-27, 147)。そして、この「シャドウプラン」には、「被災から復旧、復興にいたる時間経過において、複線的なプロセスをたどることを前提としたデュアルプランでもある」(144)との補説が続く。

「“仮設”“多重”“シャドウ”の考え方を、建築や都市づくりに入れ込む」(155)ことが有効な手立てという、研究会のそうした見極めは、「歴史[災害史]の中に仮設市街地を探る」(40)作業に加え、上述の「仮設[時限的]市街地づくり」を「仮想体験」する「住民参加型の復興模擬訓練」の運営(87, 147)に根ざしている。もっとも、著者らは、世界に散見される「難民キャンプ」を例に、「“仮”と“常”の区分が不分明になるような事態が生まれてきた」とみずから指摘し、それらの「峻別をどう図るか」は、これからの課題という(156)。

### 3-2. 「排除」の力学が作用するなかで

#### ■別なありようを思索する場としてスラム

M. デイヴィス著『スラムの惑星：都市貧困のグローバル化』(酒井隆史監訳 2010)の訳出にあたった篠原雅武(2011)は、生活空間をめぐる、主要な課題とはもはや「均質化」ではなく、「破綻」や「荒廃」ではないかと提起する(46-47)。具体的には、「荒廃していく世界から離脱し、それを[無意味なものであるとして]見ないでいることのできる自足した空間を安定的に維持するため」に創出された「ゲーテッドコミュ

ニティ」(119, 122)を一例に、その「壁」の意を考察する。

篠原雅武(2011)は、壁は確かに「離脱して自己完結した世界」と「放擲された世界」とを分離するものであるが、文化や労働において「乗り越えが可能な、包摂を制限つきで許容する、浸透度の高いものになっている」(126, 132-134)さまを衝き、壁を越えた「交流を生じさせながら、実質的には排除」(134)という構図を説き示す<sup>(19)</sup>。また、実のところ「壁の暴力性は、内部世界にもおよんでいる」(142)として、「公共的な感覚」の衰勢に加え、「監視カメラをはじめ、自分たちでは関与しない自動的システム」の代用を指摘する(142-143)。

次いで「スラム」をめぐるのは、それは「あくまでも一時的に排除されている[悲惨な]部分であり、[都市発展の活力とすべく]政策を改善すれば、健全な都市の一部分へと漸進的に包摂し再統合していくことが可能な場所である」(170-172)との主潮に対し、著者はS. ジジエクを引きながら、「包摂されることでしか救われることのない例外、悲惨な場所というのは、じつはステレオタイプでしかない」(175)と異を唱える。そもそも「スラムにおいて始まっている排除の過程は例外ではなくスラムの外側においても起こりうる、というだけではなく、.....すでにスラム化は潜在的には惑星規模で生じているのではないか」(175)と見て取る。その上で、スラムとは「包摂されていないがゆえに、包摂されるというのとは別の集合性を試み、想像することの可能な場」(176-177)と推しはかる。「来るべきスラム化」を見越して、少なくとも「主として先進諸国で生産される効率的な改良のための知の枠組みだけでは不十分であり、.....スラムにおける民衆的な運動が生み出すだろう実践知を度外視すべきでない」(181)と結んでいる。

人間居住に関わる国際機関やNGOにて、「都市貧困層の居住形成と政策・支援」をおもにア

ジアの街の現場で思考してきた穂坂光彦(2016)は、「スラム」とは「住宅の産業化と都市開発の制度化の以前から続いてきた人々の居住形成の営みが、現在もおお産業化と制度化の枠外で展開され、貧しいとはいえ住民自身による都市生活構築という〈解決〉と、貴重な低所得者用住宅ストックの蓄積がみられる世界である」(132)と説き起こす。そして、「正常」なありようからは逸脱とされる、そうした「インフォーマル居住地」の「違法」性や「異常」性を判断するには、法や規制や規範の側の適切さを見極めることも必要となる」(133)と力説する。

「インフォーマル居住地」の改善にむけた「理論的枠組み」として、著者はマクロ、メゾ、ミクロに分け、要点を次のように説いている(144-148)。

#### [1]マクロな政策—支援的な政策環境を構築する

- ・専門職として地域の問題にアプローチするとき、制度に基づいて制度的対象を切り取り、対象者のニーズを調べて制度的に対応しようと考えがちである。相手の人間的全体性やエイジェンシー(自己と社会を変革しようとする主体性)を見失いかねない。
- ・スラム住民を「意識化」し事業に参加させようと試みる以前に、支配的なシステムや政策を変えて、抑圧を取り除き、誰もが生きる機会を上げられるよう条件を整えるのが、マクロな支援政策の根幹である。

#### [2]メゾの計画—目標よりもプロセスに注目する

- ・目的自体がプロセスの中で生成変化し、そこで対応する手段すなわち資源も住民によってあらためて発見されていく。このときに必要なのは、既定の目標達成へのマネジメントよりも、システムを変化させるような関係変容

のプロセスが生起する「場」を設定することだ。

#### [3]ミクロな支援—変わりながら変える

- ・対象を客体化して一方的にエンパワーする、ということは原理的にありえない。「エンパワメント」とは「相互エンパワメント」を意味するはずだ。
- ・行政、NGO、援助機関、ワーカー、専門職など「外部者」の支援が有効なことがある。ただし……まず学びあう「場」をつくることから始めなくてはならない。すると専門職は、「都市計画家として」「開発援助専門家として」考えるのをいったん括弧に入れて、地域の課題に照らして自己相対化する必要がある。
- ・learning(学び)のプロセスとはunlearning(学んで身に付けてきたものをいったん拭き去る)のプロセスであり、その先にrelearning(学び直し)の機会が開ける。相互に変わりながら、アプローチが適正に、豊かになる。

さらに、「グローバル時代の連携協力」の視点からは、「グッド・プラクティスとして観察されるかもしれない」現場での取り組みを、個々の「プロジェクト」としてでなく、システムとして理解し、それを生み出すプロセスに注目すべきだろう」とも提言している(148)。

#### ■関係当局主導の都市整備のもとで

ときに中国では、社会科学院社会学研究所の『社会学研究』元編集長 張琢、同研究所元副研究員 張萍(星明訳2019)が『中国の近代化と社会学史』を総括する作業に際し、まずは「常に近代化が中国の社会の変化と中国の社会学研究の中心のテーマ」(i)であったと振り返っている。特に「都市化およびその研究」といった分野については、「中国の実際の国情を出発点として……計画的に城鎮化[都市化]の過程を進め、都市と農村の一体的な協調発展を形成する

ことが、中国の都市と農村の近代化の現実的、理想的なモデルである」（337）と論断する。そして、失業者や流動者が集住する「貧民窟」とは「近代化の落伍者である」（337）と言い切る。

中国・清華大学の李強は、習近平政権が推し進める『多元的都市化と中国の発展』（蔣芳婧訳2018）を説き起こすにあたり、手短かに言えば「中国の都市化は政府主導型」で、「政府が強大な組織体系と行政の力を駆使しながら、都市化を計画し推進している」（iii）と明言する。また、「都市化の核心」とは「人の都市化」との見地から、「人間自身の生産様式、生活様式、文明資質[現代文明にふさわしい行為・規範・意識・理念を形成]、社会権益[権利・機会・規則の公平を実現]という4つの面における変化」（iv-vi）の重要性を強調する。

同書には、都市化モデルとして、「開発区建設」「新都市建設」「都市拡張」「旧市街再開発」「中心業務地区(CBD)建設」「郷鎮産業化」「村落産業化」の7類型が提示され、その推進にあたっては「ボトムアップの巨大なエネルギーを決して軽視してはならない」（陳・劉2018, 72-73）、「各地の実情に応じながら、市場の力をより効果的に生かし、より多くの社会勢力[住民団体、労働団体、社会团体など]を参与させるべき」（72, 74）など、「多くのルート」（73）を通じた事業展開が記されている。

ことに「開発区建設モデル」にあっては、「開発区は農民が都市住民となるための直接の訓練の場である」（呂2018, 104）とも述べられている。また、「旧市街再開発モデル」では、「古風な街」を安易に「でっちあげ」「つくりあげる」「偽物の旧市街」整備が絶えないとして（高2018, 174-175）、「科学的なアプローチ」にもとづく「歴史的街区の総合的保護」、「新中国成立後に建てられた質が悪く、周囲となじまず、文化財としての価値のない建物」の再開発による都市イメージの向上、居住環境の改善、人口収

容力の拡大、そして高齢者を含む「弱者」への配慮などが求められている（176-180）<sup>(20)</sup>。

続いて、身近なところで、戦後日本の「簡易宿所街」（通称ドヤ街）をフィールドとする論考にあたってみたい。長年にわたり「寄せ場、釜ヶ崎、流動的下層労働者」に関わる調査を進めてきた原口剛（2016）は、大阪・築港（天保山）の「ジェントリフィケーション」[都市中心部の衰退地区で進められる再開発事業]では、「貧民の不可視化」という工作（200, 360）に加え、「記憶の忘却と改ざん」（361）がはかられたと指摘している。地理学者 W. バンギ[1979]の「人間の景観は地図のレイヤーみたいなものだ」との見方にならない（58）、当地におけるウォーターフロント開発の事情を、次のように明察する（201）。

新たな文化景観の建設は、記憶のリストラクチャリングの過程でもあった。.....「天保山」という名を与えることで、この土地のイメージは、近代化以前の遊興空間の記憶へと直結させられた。そうすることで、「築港」という名のもと積み重ねられた工業期の分厚い記憶のレイヤーは素通りされ、視界の届かぬ地下の層へと押しやられたのである。

そして、整備された「テーマパーク的な消費空間」（341）に関しては、「古くからの労働の空間のうえに、消費空間のレイヤーが折り重ねられている」（58）が、「このテーマパークが構成する虚構の“昭和40年代”からは、労働者性を見る影もなく消し去られている」（203）と強調する。この土地の「系譜」をたどる原口剛（2016）は、かつて「流動の下層労働者」と素描された、定着することのない「寄せ場の日雇労働者」（207）が、まさに複数の場所をハイフンでつないだような「横断的な地勢」（206）<sup>(21)</sup>に、別の表現では「軌跡が織りなす関係的空間」に、職や生存を求めたことを明かす（287）。

もっとも、近年、「寄せ場」はモバイル情報端末をもとにした「“デジタル寄せ場”へと化し」(343)、「社会の総寄せ場化」(345)が語られるなか、著者は、「いまや、裏表はひっくり返された。例外的だったものが常態となり、非日常は日常となった」(345)と論じる。「個であることを果てしなく強いられ、群となることを許されない」(355)、「サイバー空間へとつなぎ留められた次世代の労働者たち」(351)を眼前に、「寄せ場の記憶をたどることは、単なるノスタルジアではない。過去は、私たちがどのような状況を生きているのかを測り直し、生き残る術を手繰り寄せるために、かろうじて手元に残された手がかりなのだ」(345)との方途を示している。

### 3-3. 工学的に整備される都市に関わる言説の 量子力学的な再読

ここで、工学的に整備される都市をめぐる言説についても、試論「量子都市ガバナンス」から考え得る“読み解き”を添えながら、先学の視座を思索に織り込んでみたい。

《都市計画／工学的》とされるアプローチに関して説かれた諸状態が、量子力学的な重ね合わせ、もつれ合いにあると想見すれば、この理路もまた「コペンハーゲン解釈」が仕掛けた考えの筋道と概ね通底する。

基本的には、《工学的かつ政策的な操作》に長けた《都市計画家》、《まちづくりプランナー》や、当該領域を専門とする《開発援助専門家》という固定的な個のあり方で語られる(みずからを語る)人たちが、《観察者》の役目をこなす。そうした《専門職》の視線は、都市の《現状》という“今のありさま”、そして、観察時、当地に“在住”とされる人々に向けられる。

具体的に「どのような状態が選ばれるか」に関しては、《専門職》の眼は、いわば数多の状態から、さしあたって《あるべき》、《ふさわしい》状態をあらかじめ見定め、それらとの対比にお

いて、《規格外》と見て取った状態を選別する。その上で、とりわけ都市整備の《制度的対象》となり得る、遅れをとるなり、逸れるなり、見劣りのする“《価値のない》”—換言すれば、プロジェクトとして有意義な一状態を、此处ぞと《見出し》／《切り取り》、《近代化》、《包摂》をはじめとする《適正化》なる“変化”、さてまたその《過程》なる進行の《経路》を見据える。《でっちあげ》、《偽》などとの“誘り”を招く諸状態にしても、《対象》として見過ごせず《不適切》と断じたなら、それを取り払い、《改善》するように仕向ける。なお、“魅力のある一状態”の演出は、ややもすれば、“《無意味なもの》”を切り離し、あたかも《見ないで》いられるかのような時空の《創出》／《商品化》といったかたちでもなされる。

この分野にあっては、専門家が《工学／政策的》に重きをおく《機能》ごとに《収縮》させた、《レイヤー》の《重なり》という縮図で《可能性》を分析する工夫や、被災時も視野に入れた《時限的》な《シャドウ／デュアルプラン》といった提言がなされている。いずれも、看過すべきでないとする空間の《複数》の状態を巧みに選び取り、重ね合わせ、《計画》／《開発》の時間軸にそって配したそれらの要所をおさえるという具合である。

むろん、上述の《価値》／《意味》、《つくりあげ》、さらには《適切さ》などに関しては、異論も唱えられてきた。具体的には、《同じ人でも、時や状況が違えば、そこに見出す場所は異なる》こと、《再開発》の名においてこそ、何らかの《レイヤー》が意図的に《重ねられ》／《消し去られ》、不都合な状態の《不可視化》／《改ざん》などがはかられがちなこと、《裏》と《表》、《異常》／《例外》と《正常》／《常態》などのバイナリーの関係は《ひっくり返され》得ること、《目標達成》よりも《システムを変化させるような関係変容のプロセス》に着目す

ることなど、示唆に富むオルタナティブな見立てが示されている。ただ、これらも、やはり《観察者》が此処ぞと《見出し》、《徴づけ》した、言うなれば、同じく《操作》的に《収縮》させた状態ばかりへの論及という便宜的なやりようである。

《対象者》とされる人々のアイデンティティをめぐることは、《都市計画 / 工学》において一オルタナティブな観点からの論評にあっても一、この《操作》的な《収縮》がより顕著である。往々にして、個のあり方は、《政策的 / 批評的な操作》性の考慮からか、《均質化》された、《普通の人》、《民衆》、《都市 / 地域 / スラム住民》、さらには《難民》などという、いかにももっともらしい、しかるべき一括りでの描写で済まされる<sup>(22)</sup>。また、提言・事業展開においては、《意識》 / 《理念》などの《形成》にせよ、《思想的 / 政治的変革》にせよ、《観察者》が《あるべき》、《ふさわしい》とする方向づけのもと、その地に《住》まうとされる《民》は、そうした《闘い》の《主体》としてもっぱら際立てられ、ときにその個のあり方に対して《エンパワメント》 / 《訓練》が企図されていく。

《対象》とする《都市》 / 《場所》のありさまは《他でもありえる》 / 《無限の重なりを許容しうる》と説き、また《複数の[都市 / 場所をハイフンでつないだような ..... 関係的空間》まで見据えるなら、人についても、《観察者》が《自己相対化》した個の諸状態を見つめるのと同じ視角で、《対象者》の個のあり方、歩み方などをめぐっても、少なくともコペンハーゲン解釈的に、“際立った状態”の重なり合いを描き出せよう。

さらには、次のセクションでもふれるD.ゾーハーの『量子的自己』（ゾーハー 1991, 208; 谷村 2012, 64）になれば、私の諸状態を《ハイフン》でつなぐばかりか、《私—あなた》が《ハイフン》で結ばれた状態どうしの《相互エンパ

ワメント》、《学び直し》、《手がかり》の《手繰り寄せ》もあり得る。

なお、多世界解釈的になら、《多元的》などと当該分野の《専門家》が力説する《類型》 / 《経路<sup>ルート</sup>》だけでなく、同時に存在する状態がさらに無数あること一語られていること以上・以外に《他でもありえる》こと一を思い起こすことが可能になるう。

#### 4. 量子力学的な世界観にもとづく掘り下げから

##### 4-1. 量子力学の思考で説き示される社会の見方

社会学者の大澤真幸(2010)は、「科学革命が、科学の領域における孤立した現象ではなく、大規模な社会変容の一部として生起していた」(94)と説き明かす試みで、「量子力学」に論及している。「量子力学の含意」とは「可能性(いわば確率分布)が客観的に実在するという ..... 在り方」(134)と見て取る著者は、「同じ“精神”を共有している」運動として、20世紀初め「美術の世界」に興った「キュビズム[対象を、幾何学的な切子面に分解し、それを再構成するようにして描く技法]」(142-144)を例に、次のように論じている(145)。

多視点的なキュビズムの登場によって、長きにわたって西洋絵画を支配してきた規範—中心遠近法—が、息の根を止められる。中心遠近法は、空間を均質的なものとして捉える超越的な視点を前提にしていた。ニュートン物理学は、これとまったく同型的な態度によって支えられてきた。..... キュビズムは、対象を同時に把握する、複数の異なる視点を前提にしている。すなわち、それは、多数の認知する視点、多数の知る視点を共存させているのである。..... 単一の超越的な視点を崩壊させる、こうした視点の多数性に関して、量

子力学とキュビズムは共通しているのである。

大澤真幸(2010)は、さらに、W. ベンヤミンは「量子力学のことを意識していたわけではないだろうが」(231)と述べた上で、「一種の確率分布(それぞれの場所で光子や電子が見つかる確率の分布)として解釈されてきた」量子力学の波にあって、「観測を通じて粒子を見出すということは、可能態の中から、特定の可能性を“叩き出す”こと」にあたるが、彼自身の「歴史」とらえ方も同じく「過去の可能性を、つまり“存在していたであろうこと”を叩き出し、救済するのである」(233)と推しはかる<sup>(23)</sup>。そして、そうした「視点の置き換え、再選択」(233)とは、「現在の体制そのものを変換することを、つまり革命を意味しているのだ。革命は、未来を開くだけでなく、過去を救済するのである」(234)と説き示す。

『量子の社会哲学』の論考に、「革命は過去を救うと猫が言う」との副題を付す著者は、最後に、「量子力学的な態度」にあって「普遍性」とは、「“これですべてではない”という消極的な残余の形式で暗示されるのである」(342-343)という。

さらに、独創的な見解としては、物理学に加え、哲学、宗教学を専門領域とする、『クォンタム・セルフ：意識の量子物理学』の原著者D. ゴーハー(中島健訳1991)が、夫で精神科医のI. マーシャルとともに、その「量子的自己<sup>(24)</sup>」という創見をさらに発展させ、*The Quantum Society*[量子的社会](Zohar & Marshall 1994)という「社会の量子モデル」(12)を提起している。

量子論が社会の特徴を記述するのに役立つことを逸早く示唆したのは、おそらく、ノーベル賞を受賞した物理学者の江崎玲於奈とみる著者らは、1980年代半ばに公刊された彼の論考<sup>(25)</sup>をベースに、まずは日本社会・産業のいわゆる「集団モード」が「量子コヒーレント状態」や「超流動」という量子現象になぞらえられた思索を

たどる(Zohar & Marshall 1994, 34)。そして、さまざまなものの見方や考え方と折り合いをつけながら暮らすことが課題という西洋にむけて、みずからが構築を試みる「量子的社会モデル」では、江崎が語る「個人モード」と「集団モード」—著者らの要語では「粒子モード」と「波動モード」—がともに重要と力説する。また、それは日本の高度な集団志向社会とも、機械論的な西洋モデルの過度な個人主義[社会の粒子モデル]、コミュニタリアン社会の集産主義[波動モデル]とも異なると強調する(30, 34-35, 124)。

著者らは、「量子的自己」のありようをコミュニティのレベルにも当てはめ、各々が「それ自体」であり、また「それ自体と他のもの—それが公共空間を共有する他のもの—」でもであると説き進める(190-191)。ベンゼン環の「共鳴<sup>(26)</sup>」という状態との類比によって、そのイメージを次のように伝えている(181, 193)。

私たちは、ベンゼン環をなす各原子を、多元的な量子的社会を構成している一コミュニティのようなものと考えてよいかもしれない。可能性が重ね合わさった状態のベンゼン環そのものは、.....[数多のコミュニティを包含するひとつのコミュニティづくりを講じている、ラビ] ジョナサン・サックスが語る「複数のコミュニティからなる一つのコミュニティ」の物理学版である。.....そうした量子モデルにおいて.....量子的他者とは、私自身(の**アスペクト**一様相)であり、私の好機—私が成長し、進化するチャンス、すなわち、私自身の潜在的な自己に気づく機会—でもある。他者をそのように見ることは、寛容といった態度以上へと私たちを導く。量子的他者とは、私が必要とするものである。(斜体原著者[筆者による仮訳])



現代社会にて、他者とクリエイティブに暮らしていくという課題をめぐり、著者らは、「征服・支配」「排除・分離」のみならず、異なるものながら等しいというスタンスの「リベラルな共存」—現実には、より巧妙な隔離政策—も、すべて古典的な「機械論的モデル」と断ずる(185-187)。新たに「社会的リアリティ」を表すには、「いずれか」は「いずれも」に、「私のやり方」は「多くの可能性・真実を尊重する、分かち合われた考え方」に取って代わられなければならないと主張する(29-30)。

#### 4-2. プランニング理論をめぐる模索から

1960年、旧建設省から都市プランナーとしての第一歩を踏み出した蓑原敬(2016)は、高度経済成長が始まる当時を振り返り、「急速な都市化」を視野に「国民の社会生活の向上を目指す都市計画、住宅政策の展開が必然だと信じていた」(356)と明かす。そして、「この時代の計画思想の根底には、[人間の理性を信じる]古典的近代思想がある」(356)との説示に続けて、いかにも「絶対空間、絶対時間を基盤とするニュートン・デカルト的な世界像の上で、計画的な仕事を進めてきたと言ってよい」(357)と省察している。

もっとも、今や、「地球が持っている自然環境上の制約条件」や「国や地域の固有の文化的な発展経路」を蔑ろにした「未来への構想」は成り立ちがなくなってきた(358-359)。しかも、ことに、「量子力学に接合された宇宙物理学の発展によって宇宙像は大きな転換を遂げた」(360)と力説する著者は、次のように問いかけている(361)。

確率的、相対的な世界像を背景に、自然生態内存在としての人間、共同体内存在としての人間という認識を踏まえて、僕たちは僕たちの未来を、生物個体として主体的にどう構

想し、生物共同体として、どのような合意の形成、総意の醸成のもとに、どう、その実現にどう取り組めるのか、それが、今の僕たちに課されている根源的な問いである。都市計画とかまちづくりという人間の未来に向かっての投企もまた、このような根源的な問いから逃れることができない。

著者は、「僕たちは、少しでも行く手に光明を見出すべく、歩き続けなければならない」が、「強固な縦社会の中で、強い自己抑制をしていて、.....自らの活動領域を非常に限定的なフィールドに閉じ込めた上で、その中で考えようとする傾向が強い」(362)と、憂慮の念を表明している。

人文・社会科学系の学術書などを扱う英国の出版社、ラウトレッジは、近年、不確定性、多様性、不通約性[同じ基準では比較できないこと]といった難題に対処する、空間・物的計画の理論、概念的把握を進展させるシリーズ、「プランニング理論の新たな方向性」(New Directions in Planning Theory)を刊行している(Abrahams 2017, ii)。学際的な思考・概念化が奨励される本企画において、G.ドゥルーズ研究者で、公認建築士でもあるG.エイブラハムズ(Abrahams 2017, i-ii)は、『プランニングにドゥルーズを生かす』(*Making Use of Deleuze in Planning*)思索を深める。

具体的には、持続可能性に主眼をおくプランニング評価の実務にて広く用いられてきた「英国建築研究所環境評価手法」(Building Research Establishment Environment Assessment Method [BREEAM])などの再考とともに、G.ドゥルーズにヒントを得た「推論的、内在的な評価手法」(Speculative and Immanent Assessment Method[SIAM])という、新たなツールの案出が試みられている(i, 10, 23, 30, 32, 110)。

著者は、ひとつの目標を掲げ、あらかじめ設定された評価項目を普遍的に適用する、「樹木」モデルのBREEAMとは、本質主義的で、全体は構成要素の特性に還元して説明され得るとの見方に立ち、さらには諸アクターがそうした枠外で重要だと考える課題の多くを不問に付していると論じる(23, 32-33, 39)。ひるがえって、みずからが考案する、設計・開発チームの主要メンバーによってなされるSIAMは、完成した設計の結果として生じる特性ではなく、プロジェクトはとなり得るのかについての推測にもとづき[推論的]、さらには開発をめぐるいわば先入観的な段階よりも、設計・開発プロセスのなかで、またその一部として、企てられる[内在的]手法であると力説する(10)。

建物でも都市でも、いったん建設されると、「現実化されたアレンジメント」として理解されるだろうが、ドゥルーズのいう実在性によれば、そうした建物ないし都市のアレンジメントは、私たちを取り巻くアクチュアルな世界を形づくる数多のアレンジメントのひとつとしてとらえられよう。ドゥルーズ的な評価とは、「参考モデル」の役目を果たす、モデル化された概念に焦点を合わせるのではなく、「現実化というプロセス」を重視することになろうと指摘している(108)。

なお、著者は、疑問の余地がある「本質主義的な手法」と当を得た「非本質主義的な手法」といった単純な二元論は退ける。モデル化された概念をもとにした評価と、推論的、内在的な評価手法が異なる役割を担い、それぞれのスケールでの種々のアレンジメントで着目される、さまざまなポテンシャル(生成変化)に対応していることに論及している(180)。つまり、ドゥルーズが生かされるかをめぐり議論すべき問題は、本質主義それ自体に関してではなく、むしろ本質主義および非本質主義のツールの使い方であり、これらツールがなすこ

とや、それらが他のアクターもしくはツールがなすことにかなる影響を及ぼすのかに関わる意識であるという(182)。

結びの最後には、私たちがみずからに問わなければならないことは、単にドゥルーズが生かせるかではなく、「現実化というプロセス」に携わり、綿密に検討する新たな関係、機会を得ようと、概念的な複数のペルソナ(役柄)を演じる心構えができていくかであるとの見解も添えられている(184)。

#### 4-3. 量子力学的な世界観にもとづく掘り下げの再読

このセクションで概観した量子力学的な世界観にもとづく試みについても、試論「量子都市ガバナンス」から考え得る“読み解き”を添えながら、先学の視座を思索に織り込んでいきたい。

いずれの論考にも、なるほど《量子力学の含意》がそれらしく巧みに取り入れられ、示唆に富む見解が提示されているが、理路の基本的なベースは、突き詰めていくと、やはり“量子力学と古典物理学とのつぎはぎ”とされる「コペンハーゲン解釈」である。

そうしたスタンスに自覚的である場合、《観察者》は、みずからの個のあり方について、《複数のペルソナ(役柄)を演じる心構え》をもとに、はじめからいくつかの選りすぐりの状態をあげる。そして、その視線は、各々が関心を寄せる《対象》としてのもの・ことに注がれるが、《ドゥルーズ》的な思考を含め、《量子力学》的と称される見地は、《可能態の中から、特定の可能性を“叩き出す”こと》、《波動/粒子モード》、《現実化というプロセス》などの記述にみられるように、《収縮》という“無用な原理”(和田2002, 13-14; 谷村2009, 60)を、いわばその特長であるかのようにとらえている。

ことに、《特定》の状態を《再選択》することにより《現在の体制そのものを変換する》《過

去を救済する》との見方や、社会が《特定》の体制やスタンスなどによって仕分けられ、ふさわしいと希求するありようだけが結局のところ力説される《量子的社会モデル》にあっては、それぞれ量子力学的に重なり合いもつれ合う状態が、まさに“デコヒーレンスという[量子的振る舞いが古典的振る舞いに変わる]レンズを通して”(アル・カリーリ & マクファデン 2015, 133, 149; 谷村 2018, 7)とらえられているかのようなのである。思索の際に要点とされた《これですべてではない》という《量子力学的な態度》は、いつしか消え失せ、あらかじめ《収縮》させて取りおいたいくつかの提起したい状態—《観察者》からみて意義や価値のある《可能性》を効果的に演出できる状態—以外は、《残余》と称して片づけられてしまう。この《残余》とは、つまるところ“優越的な態度”を取り得る“選良”によるコペンハーゲン解釈的な言説に特有の術語であろう。多世界解釈的には、描出されなかった無数の汲み尽くしようのない“他の状態も相変わらず《共存》している”(和田 1998, phase 3-a, b; 谷村 2009, 61)。

技法的には、《ベンゼン環》の《共鳴》について、谷村光浩(2018, 13)は、そのケクレ構造を中国・珠江デルタの“村”での「人や組織のつながり方」に関わる記述と結びつけて考察した。先覚のD. ゴーハー & I. マーシャル(1994)は、その構造を、《複数のコミュニティ》間のつながりに適用していた<sup>(27)</sup>。今後は、コペンハーゲン解釈をベースに、この各炭素原子に、都市・国家・非政府組織・企業市民などの《アクター》はもとより、《システム》・《ツール》なども当てはめられるなど、主要な《アクター》/《システム》/《ツール》などの《それ自体と他のもの》の量子力学的なつながり方が解説される際にも、ひとつのヒントとされよう。

多世界解釈的な世界像から考えられる作業は、ひとつには、先学が《対象》を観察し、コ

ペンハーゲン解釈的に展開するさまざまな論述—さらには(量子)アルゴリズム—を糸口に、《観察者》や《対象》が維持しているに違いない“量子コヒーレント状態”を、“多世界”で推察することからとなろう。なお、その際、作業にあたる“私”なる《観察者》も、むろん量子力学的にさまざまな自己・他者、もの・こととも重なり合いもつれ合う状態にあると考える。

## 5. 改めて思索する多世界解釈から考えられる「量子都市ガバナンス」の記述

最後に、これまでの小考を手短かに整理した上で、本研究で少しずつ練り上げてきた多世界解釈から考えられる「量子都市ガバナンス」の記述に、改めて補筆を施してみたい。

### ■小論にて量子力学的な再読を試みた高論卓説の基本的スタンスは、コペンハーゲン解釈と通底

- ・《量子力学の含意》を汲んだという見解を含め、どのような説き立ても、その理路は、“量子力学と古典物理学とのつぎはぎ”とされるコペンハーゲン解釈に概ね通じることをみてきた。
- ・《観察者》は、個のそうしたあり方を含め、何らかの特筆に値するひとつないし複数の固定的な《ペルソナ(役柄)》で提示され、対象とされるもの・ことに目を向けるさまが語られる。
- ・対象とは、《《あること》にされてきた》との観点や、《観察の“対象”であると同時に観察の“主体”でもある》との視座は、“物理学からの類推”では考えることがなかった見方である。
- ・対象の「どの状態が選ばれるか」については、《特定の可能性を“叩き出す”》、《主題化》、《現実化》などの記述にみられるように、《収縮》という“無用な原理”にもとづいている。

- ・《対象者》の個のあり方は、《政策的／批評的な操作》性の考慮からか、往々にして、《民衆》、《都市／地域／スラム住民》、《難民》など、しかるべき一括りへの《収縮》描写で済まされる。
  - ・当地に《住》まうとされる《民》は、《観察者》の方向づけのもと《思想的／政治的変革》の《主体》として際立てられ、ときにその個のあり方に《エンパワメント》／《訓練》が企図される。
  - ・《象徴》・《アレゴリー》的都市、《嘆かわしい》・《虚構の理想》社会も、《レイヤー》モデル縮図、《シャドウプラン》、《システム論》も、対象を便宜的に《収縮》させた状態への論及である。
  - ・巧みに選び取られた状態は《直線的》な時間軸にならべられ、《観察の“対象”》の《転回》、《パラダイム・チェンジ》、《“変態”》メタモルフォーゼなど、《変化》・《転換》として強く説かれていく。
  - ・なお、都市整備では、事業として有意義な状態、換言すれば、当面の《あるべき》状態が見定められ、その《規格外》の状態から《制度的対象》となり得る“《価値のない》”状態が選別される。
  - ・《混成的な》諸要素からなる《“まだら”》で、それらが《多様な経路で繋がった世界》を《“どっちつかず”に生きている》との素描は、コペンハーゲン解釈の数学版的言説を想起させる。
  - ・ときに、“魅力のある一状態”の演出は、ややもすれば“《無意味なもの》”を切り離し、あたかも《見ないで》いられるかのような時空の《創出》／《商品化》といったかたちでもなされる。
- これこそ「拾い上げよ」と提起する“異論”も、やはりコペンハーゲン解釈的なスタンスから
- ・《取捨選択》をめぐるのは他の《観察者》か

ら《問い逃し》、《排除・隠蔽》などと指摘されることもあり、《屑》などと蔑ろにされたもの・ことの《拾い上げ》が提起されることもある。

- ・何かの《レイヤー》が《重ねられ》／《消し去られ》、不都合な状態の《不可視化》／《改ざん》が企てられたり、バイナリー関係は《ひっくり返され》得るとの指摘は示唆に富む。
- ・ただ、これらも、やはり《観察者》が此処ぞと《見出し》、《徴づけ》した、言うなれば、同じくあらかじめ《操作》的に《収縮》させた状態への論及という、便宜的なやりようである。
- ・《特定》の状態の《再選択》ないし新《モデル》を掲げる試みも、結局のところ、量子力学的な状態がまさに“デコヒーレンスというレンズを通して”とらえられているかのようである。
- ・《これですべてではない》という《量子力学的な態度》はいつしか消え、提起したい状態以外は《残余》とされる。これは“選良”によるコペンハーゲン解釈的言説に特有の術語であろう。

■量子力学的な世界観にもとづく思索を、多世界解釈的な見方・考え方からも深める試み

- ・この世界像からの一作業は、コペンハーゲン解釈的な論述／(量子)アルゴリズムより、《観察者》や《対象》が維持している“量子コヒーレント状態”を“多世界”で推察することからとなろう。
- ・《取り出そうとすると、抜け落ちてしまう、汲みつくされないもの》の観察ならば、同時に共存している無数の状態を《消滅》させることがない多世界解釈的な思考が足がかりとなる。
- ・多世界解釈的になら、《多元的》などと《専門家》が力説する《類型》／《経路》ルートだけでなく、語られていること以上・以外に、《他

でもありえる》ことを思い起こすことが可能になるろう。

- ・《ベンゼン環》の《共鳴》は、主要な《アクター》／《システム》／《ツール》などの《それ自体と他のもの》の量子力学的なつながり方が解説される際にも、ひとつのヒントとされよう。
- ・“私”を量子力学的にさまざまな自己・他者、もの・こととも重なり合いもつれ合う状態とみれば、その《相互エンパワメント》、《学び直し》、《手がかり》の《手繰り寄せ》もあり得る。

この多世界解釈から類推される試論「量子都市ガバナンス」の記述としては、上述の小考を踏まえ、これまでのところの最新版「多居場所(個がくらす地点)/多アイデンティティ(個のあり方)/多連係(人や組織のつながり方[“共鳴”構造])/多経路(人や組織の歩み方[量子ウォーク])解釈」(谷村 2018,15)に、ひとまずバージョン・アップを施しておきたい—補筆部分は、イタリックにて表記—。

---

#### 多居場所 / 多アイデンティティ / 多連係 / 多経路解釈 [ver. 2020]

この「多居場所(個がくらす地点)/多アイデンティティ(個のあり方)/多連係(人や組織のつながり方[“共鳴”構造])/多経路(人や組織の歩み方[量子ウォーク])解釈」においては、量子力学的に共存している複数の状態の“全体”を、多世界解釈が説き明かすような—古典論的な実在をこえた—「実在」と考える。

なお、“社会科学”とされる分野において、その“対象”は、物理学でよく図解される電子の観測のごとく普遍的に「それ」と論及できるありようではなく、“それ”なるものが、すでに量子力学的にさまざまな自己・他者や、もの・こととも重なり合いもつれ合う状態にあるとみてお

かなければならない。“対象”の設定とは、そのこと自体、コペンハーゲン解釈的に収縮させた一状態化であることに留意したい。また、そうした“対象”は、同時に、観察の“主体”でもあり得ることも、心に留めておきたい。さらに、この“対象”なるものの“全体”には、事実にもとづかず都合良く仕立て上げられた“つくりごと”が含まれていることがある。

その上で、調査時に、その“対象”なるものについて、どの状態の観察者になるかは、各状態の共存の程度に関係することになる。ただ、観察者が政策的／制度的／批評的な観点などから、此处ぞと操作的に“収縮”させた“しかるべき状態”ばかりへの論及にふれていると、それですべてが語られたかのように思い込まされ、他のあり得る状態が“不可視化”されることがある。“当人”がみずからを観察する場合にも、「周囲との相互作用」によって、そのように提起したあり方を含め、ある状態が一段と意識されるかもしれない—“ことのほか”、あるいは、“それなり”といった具合に—。もっとも、この多世界解釈的な思考では、「状態の収縮」は一切考えず、他の状態も相変わらず共存しているとみる。

いずれにしても、それぞれの観察者は、自分が唯一の存在だと思っているので、その個人に可能なさまざまな状態のなかからその結果が見えたのは単なる偶然だと思ってしまう。その時々を感じ取った(収縮)状態を、「どっちつかずに生き」、また“無意味なもの”については切り離し、あたかも見ないでいられるかのように考えてしまう。しかし、この多世界解釈的な思索では、「現実」の“全体”像を見渡してみれば、可能な状態のすべてが実際に生じているとみる。

なお、ある状態が、“実体”としてのみならず、“相応しい”—観察者の立場によっては“ノイズ”や“屑”同然—とされる倫理・価値観や世界観に根ざした“スタンス”としての意で主張されて

も、その他の状態も絶えず共存していると思考する。

また、たとえ巧みに取捨選択・再選択された諸状態をもとに、“パラダイム転換”，“転回”，“メタモルフォーゼ変態”，“多元描写”などが展開されたとしても、そこに提起されていない無数の状態との共存を同様に深慮する。

この世界像からの一作業は、コペンハーゲン解釈的な論述／(量子)アルゴリズムが衝く局面を十二分に踏まえた上で、《観察者》や《対象》が維持している“量子コヒーレント状態”を“多世界”で推察することになろう。

この多世界解釈的な思索は、ひとつには、いわば、考え・整え(られ)たこと以上・以外にあり得る「考え合わせ(られ)ていないこと」に、思いを凝らし続けることの重要性を示唆している。ある意味では、“有用”な視角や提言を力強く打ち出したい政策立案者、専門家、研究者などにとっては、“見て見ぬふり”をしたい、ないしは、“不器用な”，ことによると“封じ込めたい”ものの見方かもしれない。

この「量子都市ガバナンス」研究をめぐっては、今後、いわゆるデジタル変革下の都市マネジメントを含め、「ガバナンス」論を主軸とする作業段階へと駒をさらに進めていきたい。昨今、デジタル・ガバナンスが語られるなか、近年の中国における“デジタル礼記”のごときデジタル経済・社会の動向なども視野に、関連領域における先学の論考に大いに学ばせていただきながら、試論を一段と練り上げていく所存である。引き続き、より良い社会のありようを多元的に思索・討議する基盤づくりに努めたい。

## ■注

- (1) なお、この論文については、諸氏のお力添えのもと中国語版(谷村光浩・程雅琴2018)も近刊。清華

大学公共管理学院NGO研究所長 王名教授をはじめ、関係各位には深く感謝申し上げます。

[英文タイトル] Standpoints for Observing the Hui Merchants' Way of Life and Descriptions of "Conceivable Governance": A Case Study for Developing a Paradigm of "Quantum Urban Governance"

- (2) 「多居場所／多アイデンティティ／多連係／多経路解釈」については、次のように記してみた(谷村2018, 15)。

この「多居場所(個がくらす地点)／多アイデンティティ(個のあり方)／多連係(人や組織のつながり方[“共鳴”構造])／多経路(人や組織の歩み方[量子ウォーク])解釈」においては、量子力学的に共存している複数の状態の“全体”を、多世界解釈が説き明かすような一古典論的な実在をこえた一「実在」と考える。この“全体”には、事実にもとづかず都合良く仕立て上げられた“つくりごと”が含まれていることがある。

調査時に、どの状態の観察者になるかは、各状態の共存の程度に関係することになる。本人がみずからを観察する場合にも、「周囲との相互作用」によって、ある状態が一段と意識されるかもしれない—“ことのほか”，あるいは，“それなり”といった具合に一。もっとも、「状態の収縮」は一切考えず、他の状態も相変わらず共存しているとみる。

いずれにしても、それぞれの観察者は、自分が唯一の存在だと思っているので、その個人に可能なさまざまな状態のなかからその結果が見えたのは単なる偶然だと思ってしまう。しかし、「現実」の“全体”像を見渡してみれば、可能な状態のすべてが実際に生じているとみる。

なお、ある状態が、“実体”としてのみならず、“相応しい”—観察者の立場によっては“ノイズ”—とされる倫理・価値観や世界観に根ざした“スタンス”としての意で主張されても、その他の状態も絶えず共存していると思考する。

また、たとえ“多元描写”が展開されたとしても、そこに提起されていない無数の状態との共存を同様に深慮する。

また、この「多居場所／多アイデンティティ／多連係／多経路解釈」については、次のように書き添

えている(16)。

ここに掲げた「居場所」「アイデンティティ」「連係」「経路」は、人間の営為においてパラレル性を論じ得る具体的な例として掲げたものである。とりわけ観察したいことだけを列挙し、まさにそれらの幾重にも重なる様子が、これから考究すべき状態として特筆に値するというのではない。例示するにいたっていない他の状態とも量子的な重ね合わせ、もつれ合いにあることを絶えず思い描き続けることが肝要と考える。されど論述においては、どうにも、一見「コペンハーゲン解釈」的なライティングとならざるを得ないところがあり、その如何ともしがたい点もひとこと付記しておくたい。

- (3) たとえば、「人口学的な記述」はL. ワースの「都市の社会学的定義」にも組み入れられているが、若林幹夫(2000)は、それは「“都市が都市であること”の結果を語っているにすぎない」(11)と評している。
- (4) 『都市のリアル』とは、「都市の日常的現実よりもさらに生々しい現実」(吉原・近森編 2013, 5)で、それはひとつではなく「複数ありうる」(ii)とされる。そして、さまざまな「制度やネットワークの隙間に落ち込み、裸の状態でフローの力にさらされてしまう……人びとの限界的な生の営みが示すもの、都市的現実の裂け目に浮かびあがるもの」(5)と説き示されている。
- (5) 若林幹夫(1999)は、象徴と対比して用いられる「アレゴリー[allegory]とは、全体的な連関や一体性を欠いた世界における表象のあり方」(28)と述べた上で、「都市がアレゴリー的な表現によって把握される」とは、「都市という存在がもはや人びとの共同性に基盤を置く象徴的な体系や全体性によって支えられなくなったこと、それによって都市という巨大な人口集団からなる社会的協働連関の広がり、象徴的な体系や構造によって意味づけられ、現実化されるような広がりではなくなったということの意味している」(29)と、この要語を解説する。
- (6) さらに、若林幹夫(2018)は、これは「“都市”に限ったことではなく、「私たちは“社会”やその中の“社会的なもの”を〈あることにする〉ことによって作り出し、自ら作り出したその“社会”や“社会的なもの”を生き、それによってこの世界を了解する存在である」(26)と論及している。
- (7) 鹿島徹(2006)は、その独特な「歴史時間」(230)への理解を読者に促すにあたり、「ひたすら流れ去る時間により形成される“歴史の連続性”を打ち破り、均質・空虚な時間軸における隔たりを超えたところで、過去はその可能性(ありえた姿)において取り戻されるものとして、現在と重ねあわされる。現在は、その過去の可能性を取り戻し、それを実現する場として過去と重ねあわされる」(230-231)との素描を添えている。
- (8) この「ポストモダニズム」について、岡本充弘(2018)は、「まえがき」にて、まずは「近代が絶対化しようとしたことの相対化を論じた主張」(i)と手短かに補説している。
- (9) 飯島洋一(2015)は、「歴史は勝者が叙述する」(444)とは不変のテーゼで、米中パワーバランスの動向も念頭に、アメリカに代わって「誰が権力を握ろうが、その握った者、勝利者が歴史を叙述する」(526)構図は揺らぐことがないと説く。
- (10) 包慕萍(2005)は、研究対象地域を論じるにあたり、「農耕社会の都市」とは区別するため「遊牧都市」(11)なる要語を掲げる。これには「人間集団が宿営地を移動しても、その集住空間の構成は変わらない—つまり“都市”そのものがそっくり別の場所に移動するというもの」、 「大きな人間集団が季節によって使い分けている複数の居住拠点を移動していくというもの」(10-11)の2空間パターンに加え、遊牧をベースにした政治・経済に支えられた「非遊牧民が定住する都市」(11)が含まれている。
- (11) 宮下遼(2018, 336)は、個々の「観察者」に「興味関心に応じた観察の選択性を保証しうる建築学的歴史性、多様性が胚胎される結果」とは、「都市建設に際して既存の異教の建築物をことさらに排除せずモスクに転用し、あるいはワクフ寄進の形で別の目的で再利用したればこそ」と述べ、都市景観に保存された「記憶」の重要性を指摘している。
- (12) この概念について、吉原直樹(2018)は、「一定の属性を有する静的な構成要素のあいだでみられる諸関係ではなく、むしろそうした諸関係の集合を作り上げるのに欠かせない、構成要素の生産の経時的な反復を介して立ちあられる自己制作のプロセスのことをさしている」(162)と簡潔な解説を添えている。
- (13) 西野淑美(2018)は、「空間の自由/空間の桎梏」につき、「物理的空間に隠れた社会性」のセクショ

ンで、次のようにも要点を整理している(38)。

結論を先取りしていえば、とりわけ都市の中では、「社会」にぶつからずに済むリアリティ A と、どうしてもなくぶつかるリアリティ B とが常に並存することが観察される。前者は空間から自由であるという形で、後者は空間が桎梏として作用する形で、経験される。この両極端な形が、潜在的な「社会」の立ち現れの有無として、隣り合う人々の間だけでなく、一人の人間の中でも、常に可能性として並存し、どちらかがどちらかに解消されることがない。そうした変化しつづけるモザイク模様として都市は生きられているのではないか。

- (14) ここでの「観察」については、大黒岳彦(2016)は「ルーマンの理路」をたどり、次のように補説している(123-124)。

一回限りの観察[observation, Beobachtung]では、その時々を対象がランダムに出現しては消えるだけであって、同一性を有する安定的対象は「存在」し得ない。ここに「観察」の反復による、差異を吸収する可塑的“パターン”の形成と、その「記憶」(memory, Gedächtnis)による「区別」の安定化、さらには「記述」(description, Beschreibung)による「区別」の固定化の必要が生じる。こうして漸く“対象”が“存在”できるようになる。いずれにせよ、観察されなければ何も存在し得ない。ルーマンの所説はしたがってこの限りにおいては実在論ではない。

- (15) 若林幹夫(2010)は、「人間の社会は物質的な世界の様々な領域と、様々なメディアが生み出す様々な領域とからなる混成的[ヘテロジニアス]な構造をもっている」とのあらましを提示した後、「物質的な世界」については「自然と文化、自部族と他部族、都市と農村、聖なる領域と俗なる領域、私的領域と公的領域といった、質的に異なる領域」に仕分けられると補説する(213)。その上で、近代において支配的とされる「均質空間[均質で空虚な広がりとしての空間]」(92)にも結びつけながら、次のように解説する(214)。

均質空間という近代の空間概念がラディカルな意味をもったのは、こうした混成的な世界を実際に均質化したからではなく、そのような混成的な差異を理念的に無効化したうえで、そのことを触媒

として開発や計画などの操作に対して空間を開き、その内部を部分的には実際に均質的な場として構成していったからである。そして、このように混成的な構成をもった物理的な空間に被さり、その局所間を繋いだり、広く覆ったり、それらと重なるヴァーチャルな位相を形成するようにして、様々なメディアに媒介された移動や伝達や表象の場が、やはり混成的に形作られていったのである。

- (16) 岩見良太郎(1996, 265)は、「居住空間の本質は場所にあるが、この場所の生成には経済、政治、文化、芸術、宗教等さまざまな要因が作用している」ことを踏まえ、場所はそうした「諸要因の合力として形成される、ある種の場の影響力の下で形づくられる」と論じる。そして、その場、つまり「場所形成場」は、「影響圏の異なるさまざまな場の重層的な重なりとして想定することができる」と考えをめぐらす。
- (17) 饗庭伸(2015, 159)は、この「レイヤー」なる要語が「エコロジカルプランニング」を確立したイアン・マクハーグによって打ち立てられた概念であることにふれ、「地理情報システム」(GIS)のデザインには、その考え方が活かされたことを紹介している。
- (18) 「仮設市街地」とは、「地震等の自然災害で、都市が大規模な災害に見舞われた場合、被災住民が被災地内または近傍に留まりながら、協働して被災地の復興をめざしていくための、復興までの暫定的な生活を支える場となる市街地」と定義されている(仮設市街地研究会 2008, 19)。
- (19) 篠原雅武(2011)は、「多数多様な集まりと出合いの空間が演出されても、それは根本的なところでは、壁による首尾一貫化、矛盾の除去と抵触しない」(136)との見方を示した後、『クリエイティブ資本論：新たな経済階級[クリエイティブ・クラス]の台頭』(井口典夫訳 2008)や『クリエイティブ都市論：創造性は居心地のよい場所を求める』(井口典夫訳 2009)の原著者 R. フロリダの思考に関して、次のように論及している(137)。

リチャード・フロリダが提唱するクリエイティブ・センター(さまざまな種類のクリエイティブな人たちが集い、意見を交換し、議論し、いろいろな音楽を聴き、互いに刺激しあうことのできる魅力的な場所)は、まさしく多様でありながら、そ



れが経済成長を促進していく創造性の発揮に資する範囲に限定されている点で、コントロールされた多数多様な集まりと出会いの空間の典型といえよう。…

フロリダ自身、こういった多様な人々の集う空間の成立が、新しい地理的な階層区分と一体となって進行していることを認めている。

- (20) 都市を理解するにあたり、歴史的なアプローチの重要性を説く上杉和央(2014)は、「歴史的景観」の保存や活用の際に、次のようにも論じている(35)。

歴史的景観を保存するとは、特定の景観に何らかの価値を付与し特権を与えることであり、それ以外の見方を排除し、同種の景観との間に、序列を作ることもある。

..... 場所に刻まれた数多くの歴史の1つの断片を切り出して「歴史的景観」が生まれるものであること、その背後に光の当たらない無数の断片があることを忘れてはならない。

- (21) 原口剛(2016)は、この「横断」という表し方について、「もしかすると正しくないかもしれない」として、次のように付言している(206-207)。

私たちの眼は、二つの場所を別々の対象として捉えてしまうがゆえに、それをついつい「横断」と表現してしまう。けれども、移動することを常とする労働者にとってみれば、両者は切り離された別々の場所ではなく、あえて表記するならば「釜ヶ崎—築港」と表現されるような、連続する地勢の両極であったはずだ。

また、著者は、さらに広域に全国各地の寄せ場を「互いに絡みあわせる、横断的な闘争の地勢」(327)も論じている。

- (22) なお、先述の通り、西野淑美(2018, 34)は、「同じ人物の中でも」と、その「非均質さ」に目を向けることから論考をスタートさせている。これは、次のセクション【4. 量子力学的な世界観にもとづく掘り下げから】においても、ひとつの重要な論点となっている。

- (23) 大澤真幸(2010)は、W. ベンヤミンが持ち出した「今の時 Jetztzeit」について、「観測が、遡及的に、過去の状態 ..... をもたらしている」という、「量子力学に見られる、過去と現在の短絡現象と同じものとして—こうした短絡による過去の蘇生のようなものとして—解釈してみることができないのではない

か」(232)と論じている。

- (24) 「量子的自己」のありように関しては、谷村光浩(2012, 64)にて要点にふれている。

- (25) 参考文献には、江崎玲於奈の次の論考が掲げられている(Zohar & Marshall 1994, 345)。

Esaki, Leo 1984, "Why the West Misreads Japan," *The Bridge*, Journal of the National Academy of Engineering, Vol.14, No.1, pp. 2-5.

- (26) 共鳴については、谷村光浩(2018, 6, 17)にて概説している。

- (27) D. ゴーハー& I. マーシャル(Zohar and Marshall 1994, 193)は、「複数のコミュニティからなる一つのコミュニティ」(Fig. 8.3)において、「公共圏」が共有されることを明示しているが、それは共有される可能性のある量子力学的な重ね合わせ、もつれ合いのありようのなかの一状態ととらえるべきであろう。

## ■参考文献

Abrahams, G. 2017, *Making Use of Deleuze in Planning*, New York, Routledge.

饗庭伸 2015, 『都市をたたく』, 東京, 花伝社.

アル・カリーリ, J. & J. マクファデン(水谷淳訳) 2015, 『量子力学で生命の謎を解く』, 東京, SBクリエイティブ.

包慕萍 2005, 『モンゴルにおける都市建築史研究』, 東京, 東方書店.

カー, E. H. (清水幾太郎訳)1962, 『歴史とは何か』, 東京, 岩波書店.

陳宇琳・劉精明 2018 (蔣芳婧訳), 「中国都市化“推進モデル”の7類型」, 李強編『多元的都市化と中国の発展』, pp. 47-74, 東京, 日本経済評論社.

程雅琴, 谷村光浩 2013, 「徽州商人のくらしが考究される視座、そして“考えられるガバナンス”の記述」, 『名城論叢』, Vol. 13 No. 4, pp. 93-113, 名古屋, 名城大学経済・経営学会.

近森高明 2013, 「終章II:〈都市的なもの〉の救出」, 吉原直樹・近森高明編『都市のリアル』, pp. 227-242, 東京, 有斐閣.

大黒岳彦 2016, 『情報社会の〈哲学〉』, 東京, 勁草書房.  
デイヴィス, M. (篠原雅武・丸山里美訳) 2010, 『スラムの惑星』, 東京, 明石書店.

出口敦 2020, 「Society 5.0の考え方にもとづく次世代スマート・シティの構築に向けて」, 日本都市計

- 画学会編『スマート化が進む時代の都市の空間像とマネジメント』（第43回都市計画セミナー資料），pp.1-1-1-19，東京，日本都市計画学会。
- フロリダ，R.（井口典夫訳）2008，『クリエイティブ資本論』，東京，ダイヤモンド社。
- フロリダ，R.（井口典夫訳）2009，『クリエイティブ都市論』，東京，ダイヤモンド社。
- 高天 2018（蔣芳婧訳），「旧市街再開発モデル」，李強編『多元的都市化と中国の発展』，pp. 167-180，東京，日本経済評論社。
- 原口剛 2016，『叫びの都市』，京都，洛北出版。
- 穂坂光彦 2016，「都市貧困層の居住形成と政策・支援」，松行美帆子他編『グローバル時代のアジア都市論』，pp. 132-149，東京，丸善出版。
- ハーバード，P. 他（山本正三・菅野峰明訳）2018，『現代人文地理学の理論と実践』，東京，明石書店。
- 飯島洋一 2015，『建築と歴史』，東京，青土社。
- 岩見良太郎 1996，「居住空間の再生と都市計画」，鈴木浩・中島明子編『居住空間の再生』，pp. 259-280，東京，東京大学出版会。
- 仮設市街地研究会 2008，『提言！仮設市街地』，京都，学芸出版社。
- 鹿島徹 2006，『可能性としての歴史』，東京，岩波書店。
- 李強編（蔣芳婧訳）2018，『多元的都市化と中国の発展』，東京，日本経済評論社。
- 呂鵬 2018（蔣芳婧訳），「開発区建設モデル」，李強編『多元的都市化と中国の発展』，pp. 75-112，東京，日本経済評論社。
- 町田茂 1994，『量子力学の反乱』，東京，学習研究社。
- 間宮陽介 2005，「はじめに」「都市の思想—“非”都市から見た都市」，植田和弘他編『都市とは何か』，pp. 1-35，東京，岩波書店。
- 蓑原敬 2016，「対談を終えて」，代官山ステキなまちづくり協議会編『まちづくりの哲学』，pp. 355-364，京都，ミネルヴァ書房。
- 宮下遼 2018，『多元性の都市イスタンプル』，大阪，大阪大学出版会。
- 松村伸 2016，「総説：メガシティと地球環境をめぐる問題群」，村松伸他編『メガシティとサステイナビリティ』，pp. 1-34，東京，東京大学出版会。
- 長峯晴夫 1985，『第三世界の地域開発』，名古屋，名古屋大学出版会。
- 西野淑美 2018，「空間の自由／空間の桎梏」，若林幹夫他編『社会が現れるとき』，pp. 31-65，東京，東京大学出版会。
- 岡本充弘 2018，『過去と歴史』，東京，御茶の水書房。
- 大室幹雄 1981，『劇場都市—古代中国の世界像』，東京，三省堂。
- 大澤真幸 2010，『量子の社会哲学』，東京，講談社。
- 篠原雅武 2011，『空間のために』，東京，以文社。
- Tanimura, Mitsuhiro 2005, "Development and Urban Futures," *The Journal of Social Science*, No. 54, pp. 49-72, Tokyo, International Christian University.
- Tanimura, Mitsuhiro 2006, "Beyond UN-Habitat's Classic Framework in Urban Development Strategies," *The Journal of Social Science*, No.57, pp. 275-304, Tokyo, International Christian University.
- 谷村光浩 2009，「物理学からの類推より“考えられるガバナンス”の記述」，『名城論叢』，Vol. 9 No. 4, pp. 51-66, 名古屋，名城大学経済・経営学会。
- 谷村光浩 2012，「移動する人々をめぐる論考からの類推より考えられる“量子都市ガバナンス”の記述」，『名城論叢』，Vol. 12 No. 4, pp. 49-70, 名古屋，名城大学経済・経営学会。
- 谷村光浩 2018，「多世界解釈からの類推より考えられる“量子都市ガバナンス”の記述」，『名城論叢』，Vol. 18 No. 4, pp. 1-19, 名古屋，名城大学経済・経営学会。
- 谷村光浩・程雅琴（程雅琴訳）2018，「徽州商人生活方式的考察視角，以及“可想象的治理”記述」，王名主編『中国非営利評論』，Vol. 22, pp. 176-204, 北京，社会科学文献出版社。
- 上杉和央 2014，「歴史的景観」，藤井正・神谷浩夫編『よくわかる都市地理学』，pp. 34-35，京都，ミネルヴァ書房。
- UN-HABITAT 2016, *Urbanization and Development: Emerging Futures*, Nairobi, United Nations Human Settlements Programme.
- 和田純夫 1998，『シュレディンガーの猫がいっぱい』，東京，河出書房新社。
- 和田純夫 2002，「量子力学の多世界解釈」，大槻義彦編『現代物理最前線 6』，pp. 1-60，東京，共立出版。
- 若林幹夫 1999，『都市のアレゴリー』，東京，INAX 出版。
- 若林幹夫 2000，『都市の比較社会学』，東京，岩波書店。

- 若林幹夫 2010,『〈時と場〉の変容』, 東京, NTT 出版.
- 若林幹夫 2014,『都市論を学ぶための12冊』, 東京, 弘文堂.
- 若林幹夫 2018,「“都市”をあることにする」, 若林幹夫 他編『社会が現れるとき』, pp. 1-30, 東京, 東京大学出版会.
- 吉原直樹・近森高明編 2013,『都市のリアル』, 東京, 有斐閣.
- 吉原直樹 2018,『都市社会学』, 東京, 東京大学出版会.
- 張琢・張萍（星明訳）2019,『中国の近代化と社会学史』, 京都, ミネルヴァ書房.
- ゾーハー, D. (中島健訳) 1991,『クォンタム・セルフ: 意識の量子物理学』, 東京, 青土社.
- Zohar, D. and I. Marshall 1994, *The Quantum Society*, New York, William Morrow and Company.